

二重盲検法を用いた老人プライミング効果の検討

○中分遥¹・竹澤正哲²

(¹上智大学総合人間科学研究科・²上智大学総合科学部)

キーワード：ステレオタイプ・プライミング 老人プライミング

Testing Effects of Elderly Priming on Behaviour by a Double-blind Method

Yo Nakawake¹ and Masanori Takezawa²

(¹Graduate School of Human Science, Sophia University, ²Faculty of Human Science, Sophia University)

Key Words: stereotype priming, elderly priming

目的

無意識的な過程が行動に影響を与える例としてステレオタイプ・プライミングという現象が知られている。その代表例としてしばしば挙げられるのが Bargh, Chen & Burrows (1996) による老人プライミングの実験である。Bargh らは老人に関連する単語を含む乱文構成課題に回答することで老人という概念がプライムされた実験条件の参加者は、老人とは無関係な単語を用いた課題に回答した統制群の参加者に比べ、実験終了後に廊下を歩く際の歩行速度が遅くなることを示した。特定のステレオタイプをプライムするとそれと関連付けられた行動に変化が生じるステレオタイプ・プライミングという現象は、性別 (Shih et al., 1999)、職業 (Dijksterhuis & van Knippenberg, 1998) など多くのステレオタイプで見出されている。本研究では、ステレオタイプ・プライミングの中でも、特に老人プライミングという特定の現象に絞ってレプリケートを試みた。なぜなら、この現象はステレオタイプ・プライミングの代名詞と言えるほど知名度が高いにも関わらず、本研究の開始時点では Cesario & Higgins (2006) 以外の追試実験は公刊されていなかったからである。老人が若者より動作が遅いというステレオタイプは文化を超えて普遍的であり、老人プライミングが日本で追試できないと考える積極的理由はない。そのため、Bargh et al. (1996) が行ったオリジナルの老人プライミング実験をレプリケートすることには、別のステレオタイプを用いた概念的レプリケーションでは得られない重要な意味があると考えられる。なお本研究は Bargh et al. (1996) の実験 2 の追試であるが、二重盲検法により実験者効果を厳密に排除した点が異なる。Bargh et al. (1996) の実験手続きを見る限り、実験者効果が厳密に排除されていたか判断できない。

方法

実験参加者 都内の大学生 32 名が参加した。参加者はランダムに 2 条件 (老人条件/若者条件) に割り振られた。参加者の条件配置は、実験者が実験室から退室した後、参加者が乱文構成課題に回答する直前にコンピュータによってランダムに決められた。なお、歩行時間測定中に実験者と会話を交わした参加者、及び、歩行時間を測定されていることに気づいた参加者は分析から除外してある。

手続き (実験前の歩行速度の測定) 参加者は、実験室に到着すると、実験室の入口から 12.5m 離れた部屋の入口にある質問紙の入った箱から質問紙をとってくるよう実験者から指示された。廊下には実験室の入口と質問紙の入った箱の 2 箇所に目印がつけられていた。その 2 箇所を参加者が移動する時間を、参加者に気付かれないよう実験者が測定した。(実験の流れ) 参加者が実験室に戻り、質問紙に回答した後で実験者は以下の指示を残して部屋を退室した。1) 全ての指示は机の上にあるパソコンに表示される。2) 課題修了後、退室を指示するメッセージが表示されたら、荷物をまとめて退室し、先ほど質問紙を取りにいった場所まで歩いて行き箱の中に質問紙を入れて帰宅する。3) 実験者は実験室の外に設置

された受付に待機しているが、実験終了後は特に用事はないので声をかける必要はない。実験者退出後、参加者はパソコンの指示に従い乱文構成課題を行い、パソコンの指示に従い退出した。退室後、2つの目印間を歩行する速度は、再度実験者によって測定された。質問紙を箱に入れた後、参加者はデブリーフィングを受けて実験は終了した。なお、参加者が退出指示の教示をうけると同時に、実験者が持っているノートパソコンにシグナルが送信される仕組みとなっており、実験者は歩行速度測定に先立ち、退室メッセージが表示されてから部屋のドアを開けるまでの身支度にかかった時間も測定した。(乱文構成課題) 5つの単語を文法的に意味が通るように並び替えて文章を作るという課題であった。全部で 15問あった。若者条件では若者に関連する単語 (e.g., 未熟な、原宿、ダーツバー)、老人条件では老人に関連する単語 (e.g., 伝統的な、巣鴨、ゲートボール) を用いた。なお実験に先立ち、参加者と同じ大学の学生 5 名が「若者」「老人」と関連する単語のリストを作成し、続いて別の 10 名がそれぞれに単語についてどの程度「老人」あるいは「若者」を連想するのか 7 点尺度で評定した。老人らしさ、若者らしさそれぞれの得点に基き上位 23 単語を選出し実験に利用した。(実験者効果の排除) 実験者にはデータ解析が始まるまで、参加者がどの条件に配置されたか一切知らされなかった。

結果

プライミング後の平均歩行時間は高齢者条件では 12.9 秒 ($SD = 1.38$)、若者条件では 12.22 秒 ($SD = 1.57$) であり対応のない t 検定の結果、両者に有意な差はみられなかった ($t(29) = 1.38$, $p = n.s$, $r = 0.25$)。その他の分析結果は発表時に報告する。

考察

実験者効果を排除して Bargh et al. (1996) による老人プライミング実験を追試したが、老人ステレオタイプの活性化が歩行速度に及ぼす影響は観察されなかった。効果量 r は 0.25 程度と決して低くはないが、オリジナル実験の参加者数は本実験とほぼ同じであり歩行距離も 9.75m とむしろ本実験より短いことなどを考えれば、老人プライミングは仮に存在しても容易に再現される現象でない事が伺える。老人の動作が遅いことは万国共通であるにも関わらず、この最も知名度の高い知見が容易に追試できないことは、ステレオタイプ・プライミングが意外と脆弱な現象である可能性を示唆するかもしれない。さて、本研究の実施後、Doyen, Klein, Pichon & Cleeremans (2012) の論文が出版された。彼らもまた実験者効果を厳密に排除した追試で老人プライミングが再現されないことを見出した。さらに彼らは、部屋から退室するよう口頭で指示を出す実験者が、参加者の条件を知っている場合にのみ、老人プライミング現象の再現に成功したことを報告している。本研究と合わせて、ステレオタイプ・プライミングにおける実験者効果の影響が強く示唆される。

謝辞 本研究は著者の指導下で執筆された吉本百合恵による 2011 年度上智大学総合人間科学部心理学科卒業論文に基づく。ここに感謝の意を記す。